

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

問われるストリート・エスノグラフィーの方法：
都市ストリートへのアプローチの変遷：
「歩く者」と「見る者」の間で：
ストリートの空間論の系譜と現在：
都市地理学を中心にして

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2010-03-23
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 加藤, 政洋
	メールアドレス:
URL	所属:
	https://doi.org/10.15021/00001229

都市ストリートへのアプローチの変遷 ——「歩く者」と「見る者」の間で

ストリートの空間論の系譜と現在

都市地理学を中心にして

加藤 政洋

立命館大学

本稿は、これまでの主たる都市論のなかから〈ストリート〉との関連が深い論考を選び抜き、それぞれの参照・影響関係や同時代性を考慮しながら、都市地理学のオルタナティブとして系譜学的にまとめたものである。ここで〈ストリート〉との関連が深いというのは、〈ストリート〉を対象として扱うというよりは、むしろ〈ストリート〉における空間の経験、場所感覚を拠り所としながら都市を論じ、表象する実践全体を指している。なかでも特に注目したのが、ヴァルター・ベンヤミン、ミシェル・ド・セルトー、シチュアシオニスト、デイヴィッド・ハーヴェイ、ロサンゼルス学派の都市論であり、それらにド・セルトーの戦術／戦略論、アンリ・ルフェーブルの空間の生産論、そして地理学的想像力（ハーヴェイ）、認知地図作成（フレドリク・ジェイムソン）、グローバルな場所感覚（ドリーン・マッシー）、状況に置かれた知（ダナ・ハラウェイ）といったグローバル化時代の空間的想像力にまつわる議論を接ぎ木することで、ストリートにおける生きられた経験を起点とする都市論の可能性を展望する。

- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none">1 はじめに2 都市地理学のオルタナティブ<ul style="list-style-type: none">2.1. シカゴ学派
——都市地理学の救世主？2.2. 都市空間の文学性
——ヴァルター・ベンヤミン2.3. 都市の心理地理学
——シチュアシオニスト2.4. 都市のメンタルマップ
——ケヴィン・リンチ2.5. 参照枠としての近代化3 時間地理学から空間の実践へ<ul style="list-style-type: none">3.1. 時間地理学とその批判3.2. 「戦術」と「戦略」3.3. 歩行者の足どり | <ul style="list-style-type: none">3.4. ストリートの風景4 D. ハーヴェイの都市へのまなざし<ul style="list-style-type: none">4.1. 休みなき分析者4.2. 都市へのまなざし4.3. 都市表象の実践5 ロサンゼルス学派の都市論<ul style="list-style-type: none">5.1. 移動する都市論？
——ロサンゼルス学派の形成5.2. ロサンゼルス（学派）の特殊性5.3. 都市の記述をめぐって5.4. ソジャのまなざし5.5. ひとつの回答6 生きられた経験を起点として
——まとめに代えて |
|---|--|

キーワード：ヴァルター・ベンヤミン、ミシェル・ド・セルトー、ケヴィン・リンチ、シチュアシオニスト、アンリ・ルフェーブル、デイヴィッド・ハーヴェイ、ロサンゼルス学派、ドリーン・マッシー

1 はじめに

都市なる空間への問いは、人文・社会科学における諸種の領野からさまざまに発せられ、またそこから都市をめぐるいくつかの理論が生み出されてきた。都市を問う者は、当然ながらそれに答えようとし、都市をもの語り、表象する。このような都市にまつわる言説を生産する数多くの論者たちのなかから、英国の社会学者ロブ・シールズは自身の言う「都市理論のオルタナティヴな伝統」(Shields 1996)に属する者を大雑把に選り出してみせた。ヴァルター・ベンヤミンとミシェル・ド・セルトーから、ジャック・デリダ、ミハイル・バフチン、ジル・ドゥルーズ、ギー・ドゥボールに代表されるシチュアショニストにいたるまで、そこには大物^{ビッグネーム}の名がづらなる。一見して明らかなように、「都市理論家」の枠にはとても収まらない論客ばかりだ。

彼らが都市を——あるいは都市で——省察する際、その構えないし対象との距離の取り方には差があるとはいえ、このうちの数組にはある共通点が存在しているように思われる。それは、都市を記述する、あるいは都市理論を練成する際の起点が路上^{ストリート}＝街路にあるということだ。「遊歩」のベンヤミン、「歩行」のド・セルトー、「漂流」のシチュアショニスト——彼らは、街路を歩行するという身体的な行為を空間の実践として理論化し、また場所と空間の関係を考察する方法として定式化したのである。

ところで、街路を起点とした都市記述という点では、人文地理学における都市研究にも一定の蓄積がある。すぐさま思い浮かぶのはトルステン・ヘーゲルストランドが創始した時間地理学、あるいは都市のインナーシティをフィールドワークの舞台としたウィリアム・バンジの「探検」などであろうか。ヘーゲルストランドの時間地理学が都市生活の「ミクロ地誌」への感性を共有しているという点でベンヤミンの都市論と類似していること (Gregory 1994a: 624; 1994b: 249)、あるいはバンジの探検がアンリ・ルフェーブの「日常生活批判」やシチュアショニストの議論と類似していることなどはすでに指摘されているとはいえ (Merrifield 1995)、都市地理学において明確に「遊歩」や「漂流」を実践する、もしくはそれらを都市記述の方法に取り込むといった例はあまりない。仮に歩行をつうじて都市を分節化し記述する実践があるとすれば、それらをストリーートの地理学とでも呼ぶことができるのだろうが、「巨大都市やグローバルな都市」における「漂流」や「遊歩」は、もはや「意味を持たない」のであろうか (ライクマン 2001)。

しかしながら、意外なことに、ポストモダンの転回以降、1990年代に新たな空間論を切り開いて人文地理学を牽引するとともに、周辺諸科学にも多大な影響を及ぼしてきた2人の論客ドリーン・マッシーとエドワード・ソジャが、それぞれまったく別の文脈で、ストリーートのレヴェルから都市の記述を試みている。文脈を異にするにもかかわらず、そして街路の経験に対する重きのおき方に違いもあるとはいえ、両者の記述にはあ

る共通の目的が設定されている。すなわち両者は、グローバル化する世界／都市のありようを街路における経験から記述することを試みているのだ。マッシーはグローバル化を主題としてロンドン郊外のキルバーンを (Massey 1993)、ソジャは都市性の歴史と空間再編を主題としてアムステルダムを (Soja 1996)、それぞれストリートの風景から書き起こし見事にその主題に到達している。筆者は偶然にも両者の論文を日本語に訳出する機会を得たが、まるでグローバル化とストリート地理学の関係を象徴するかのように、前者が「グローバル化の文化地政学」の特集号 (『思想』933号) に、そして後者が「フィールドワーク／歩行と視線」の特集号 (『10+1』24号) にそれぞれ掲載された。

本稿では、このマッシーとソジャの都市記述にいたる、ストリートをめぐる地理学の系譜をたどり、最終的にその構想が生きられる経験から都市の全体性ないしはグローバルな空間の位相を照射する可能性を探究するものであることを明らかにする。ここでの作業は、「都市理論のオルタナティブな伝統」というよりは、むしろ都市地理学のオルタナティブとしてストリートの地理学を位置づけることにほかならない。

2 都市地理学のオルタナティブ

ストリート地理学の系譜をたどるにあたり、まずは諸種の都市研究のなかから関係する議論を一瞥しておこう。ここで取り上げるのは、筆者が大城直樹と共同で編集した『都市空間の地理学』(加藤・大城編 2006) で詳細に論じられたシカゴ学派、ヴァルター・ベンヤミン、ミシェル・ド・セルトー、シチュアシオニスト、ケヴィン・リンチである。なお後の章で、やはり『都市空間の地理学』で論じられたヘーゲルストランドの時間地理学、デイヴィッド・ハーヴェイならびにロサンゼルス学派の都市論についても触れるが、ここでの議論はあくまでストリートの地理学との関連で展開されるため、詳細は同書の各章を参照されたい。

2.1. シカゴ学派——都市地理学の救世主？

1925年は都市論の系譜を考える上できわめて重要な年となった。というのも、この年にその後の都市研究に多大な影響をあたえつづけることになる、ロバート・パークらの『都市』(Robert E. Park, Ernest W. Burgess and Roderick D. McKenzie, *The City, The University of Chicago*, 1925) が出版されたからである。本書の出版とその後に生み出されてゆく多彩なモノグラフとによって、シカゴ大学を拠点とするこれらの研究者とその弟子たちの一群は、シカゴ学派と称されるようになる。

フォーディズムを基軸とする生産様式が確立されはじめた「衝撃都市」シカゴの変貌を目の当たりにするなかで、パークらは「都市の構造は人間性にその基礎をおいている」、したがって「都市は人間性そのものの表現である」という発想のもと、「都市コミュ

ニティの範囲内——実際には人間の居住地である自然地域の範囲内——で、さまざまな力が働いており、それによって都市の人口や施設を秩序正しく、また特有な集団化をもたらしている」という認識を研究の前提にして、「これらの諸要因をそれぞれ個別的に明確化し、そしてまたこれらのさまざまな力が協同してもたらした人口や施設の特有な集合状態を記述したりすることを目指している科学」であるところの人間生態学ないし都市生態学の立場から、構造としての都市空間を分節化した。

「都市の生態的組織における第一次的な要因」として「輸送と通信、鉄道と電話、新聞と広告、鉄筋建築とエレベーター」といった建造環境やメディアが重視されたのは、都市の空間的構成が「一個の厳然たる外在的な事実」として認識されていたからである。つまり、それらは都市に暮らす人々の「上に君臨し、付与された意図と権限をもって、逆に居住者をつくりあげる」という、言わば1つの構造として考えられていたのである。

こうした独特の立場とともに、彼らの手法を特徴づけたのが、都市民族誌への志向である——「ボアズやローウィーというような人類学者が、北米インディアンの生活や習俗の研究に費やしたと同じ〔くらい〕辛抱強い観察の方法」、あるいは「参与観察」（マリノフスキー）を都市誌へ援用するというのだ。パークたちは、「大学の校門からほんの一足を踏み出せばすぐそこにある、活気に満ちた、濃密な、異質な文化」を観察させるべく、「学生たちを急ぎ立てて、まるでそれが遠くはなれた異国の地であるかのように、都市の探検を始めさせた」（ヴァン＝マーネン 1999: 45）。そして、「これらの学生」が「フィールドワークにおいて都市の他者を、一般的には放浪と怠惰と犯罪が織り成すいかかわしい世界を理解することに取り組むことで生み出されたのが（マクドナウ 2001）、ノーマン・S. ハイナーの『ホテル・ライフ』やハーベイ・S. ゴーボーの『ゴールド・コーストとスラム』といった、すぐれたモノグラフであった。こうした実践は、単に人類学の手法を都市の街路に持ち込んだというよりも、むしろ「ありふれた場面や活動のなか」に、つまり日常性のなかに「重大な意味」を見いだしていたという点で、アンリ・ルフェーブルによる日常生活の発見を先取りしていたとも言える。

この点においては、関東大震災後に人類学の手法を意識しながら考現学を創始した今和次郎、「都市の肖像」から『パサージュ論』へと歩みを進めたヴァルター・ベンヤミンとの同時代性にも注目しておかななくてはなるまい。

ところで、1967年にパークらの『都市』が「社会学の遺産」シリーズの1冊としてシカゴ大学出版から再版された際、編集したモーリス・ジャノウィッツは「本書には、都市生活の文化的パターンに関して鍵となる理論的説明と解釈的論考の双方が収録されている。ここに欠けているのは詳細な記述的発見〔＝都市民族誌〕であり、読者は個々のモノグラフ研究にそれらを見いださなければならない」（Janowitz 1967: viii）と述べることで、シカゴ学派における民族誌ないしモノグラフの重要性を読者に喚起させようとしているのだが、皮肉にも偏向的に『都市』——なかんずく、その第2章に収録された

バージェスの同心円地帯モデル——に注目したのが、都市地理学であった。

バージェスの同心円地帯モデル concentric zone model は、「都市の発展」を空間構造として図化したものである。そもそも、「人口構成の多様化に代表される社会構造の変化」は「都市発展の諸過程の本質」であるという認識を出発点としていたにもかかわらず、変化や諸過程を動態として考えることなく、つまり、社会過程を介在させることなしに、単に都市の空間的構成を社会の地理的表現と見なしてしまう、空間物神論の様相を呈していた。ところが、理論が枯渇していた地理学では、都市内部の空間構造を明晰にモデル化したバージェスをまさに救世主とばかりに受け入れ、扇形モデル（1939年）や多核心モデル（1945年）といった構造把握がなされていく。バージェスの図式はさまざまな都市モデルを派生させるとともに、社会地区分析や因子生態分析にもとづく事例研究の勃興を招いたのだった。

いま振り返れば、「シカゴ学派はその形式主義的側面のみを、過度に強調されたものとして影響力を持ってゆく」こととなり、都市地理学は「……シカゴ学派の知見から、空間的秩序に関する像のみを、まさに剥ぎ取ってくることから出発した」とも言えるのである（丹羽1996）。

1970年を前後する時期になると、地理学の内外でシカゴ学派——なかなずく、バージェスのモデル——に対する批判が同時多発的にあらわれる。後述するドゥボールらの漂流論、哲学者アンリ・ルフェーブルによる生態学的視点の批判（『都市革命』1970年）、空間物神論に対する都市社会学者マニエル・カステルの批判（『都市問題』1973年）など、主としてフランスの都市論における批判のほか、地理学者デイヴィッド・ハーヴェイによるエンゲルスとの比較（『都市と社会的不平等』1973年）なども見られた。

2.2. 都市空間の文学性——ヴァルター・ベンヤミン

眼前にありありと思い浮かべているものに言葉を見出すこと——それはいかに困難でありうるのか。しかし、ひとたびその言葉が来たと、それは小さな槌で打ちながら現実につかり、銅版を打って浮き彫りにするように、この現実から像を打ち出すのだ。

（ヴァルター・ベンヤミン「サン・ジミニャーノ」の冒頭の一文）

ドイツの思想家ヴァルター・ベンヤミンは、都市を形象化することに取り組み、苦闘した人物である。「形象化」とは、辞書的には「思想や感情など観念として存在するものを、何らかの手段で形にして表し出すこと」であるが、ベンヤミンにとってそれは「言葉を見出すこと」によってはじめて「像が立ち現われ」ることを意味していた（ベンヤミン1997:251）。この場合、「像」は「都市の肖像」と置き換えてもよい。

「都市の肖像」——この言葉は、ベンヤミン自身が訪れた都市（ナポリ、モスクワ、ヴァイマル、マルセイユ……）での体験をスケッチした諸エッセイをまとめる際に使用

される言い方である。ベンヤミンはそのなかで、都市（論）にまつわる、実に興味ぶかい（時には謎めいた）言葉をいくつも書き留めていた。たとえば、「鏡のなかの都市」と副題の付けられた「パリ」。彼は「この都市は、己れを構成する魅力的きわまるモチーフの数々を、練達の小説家のごとく、念入りに用意してきたのではないか」と問い、「すべての都市のうちで、パリほど親密に書物と結びついた都市はない」と言明する（ベンヤミン 1997: 232, 233）。そして書物と都市空間の親和性を手がかりに、都市を読み解く際の彼なりの立場を以下のように示すのである。すなわち、

都市の文学的スペクトルが、プリズムのような磨かれた知性により分光されるとすれば、私たちが中心から周縁へと近づくにつれて、書物たちはだんだん奇妙な外観を呈してくる。この都市についての紫外線的な知識と赤外線的な知識があって、この2つはもはや本という形式に押しこめきれない。つまり写真と都市地図——個々のものについての正確きわまる知識と、全体についての正確きわまる知識。（ベンヤミン 1997: 234）

「写真」と「都市地図」を両端とする「都市の文学的スペクトル」。彼はこの両者を否定しているのではない。ただ、その関心はあくまで都市の「肖像」を浮き彫りにする「小さな槌」となり得る言葉に注がれていたのであり、後述するように、その一端は、「街区全体が、己れの秘密を打ち明けるのは、そこにある通りの名においてなのだ」（1997: 235）という固有名（街路名）へのこだわりにも見て取るができる。

とはいえ、「言葉を見出す」ことは、たしかに困難な営為であった。

すでに駅前で、モスクワの街はその姿を提示しているように思われる。キオスク、アーケ灯、家屋群が結晶して、二度と回帰しない形象となる。だがそれは、私が名前を探したとたんに、飛散してしまう。（ベンヤミン 1997: 166）

都市を語り、歩く方法のうち、結局、最後に残るのは「地図や案内図」なのか？ ベンヤミンはそんなふうに嘯いてみせるものの、「夜、ベッドのなかでの空想力は、現実の建物や公園や街路を、曲芸のように操る」（1998: 168）と付言する。なにもこれはベッドのなかだけの夢物語ではない。歩行する際にその土地に付けられた名前（音韻）——多くの場合は街路名——を想起した瞬間、「その音のまわりに、空想力が一瞬のうちに、まるまるひとつ分の街区を築いてしまう」ほど、歩行と意味作用のあいだには強固な結びつきがあった。ベンヤミンにとって都市の街路を歩くことは、現実にはぶつかりながらも都市の像を何とかして打ち出す実践でもあったのだ。

さて、すでに述べたように、ベンヤミンは地図的表象を必ずしも否定していたわけではないけれども、都市を一望のもとに把握するといった営みとは無縁であったし、固有（街路）名へのこだわりから、あちらへこちらへと歩を進める彼の足どりは、とかく「迷

宮」を描きがちであった。

では、なぜ彼は街路名にこだわったのだろうか。ベンヤミンはパリが「活動的な都市、つねに動いている都市」であることを認めつつ、それは「街路や広場、あるいは劇場の名前にひそむ抑止しがたい力」によって引き起こされると指摘する（ベンヤミン 2003 [P1, 1]）。街路名には、都市を歩く者たちの「知覚を押し広げ……陶醉」させる「喚起力」があるというのだ（ベンヤミン 2003 [P1a, 2]）。ド・セルトーはそれが——彼自身は「固有名詞の魔力」と呼ぶ（ド・セルトー 1987: 223）——、伝説、思い出、夢といった都市にまつわる言説のトポスをかたちづくると主張していた。すなわち、

まず第一に、この象徴機構は場所になにかの言葉をまとわせて、その場所を住めるもの、信じられるものにする（もはや分類する権力ではなくなって、なにか別のものを「許す」権能になる）。またそれらは、歩いてゆくからだや身ぶりのなかにひそんでいて、いまもおうごめいている亡霊（消えうせたものとされてしまった死者たち）をよび起こし、思い出させる。そしてそれらの象徴機構は、名をあたえつつ、すなわち他者（歴史＝物語）の命令を伝えつつ、機能主義的同一性をひきはがし変容させるのであり、そうしながらその場所に、他者の掟がうがつあの侵食作用を、あるいは非一場所をつくりだしているのである。（ド・セルトー 1987: 224）

（不思議とベンヤミンへの言及はないのだけれども）このようなド・セルトーの議論によって明らかになるのは、モダニティによって覆い隠されたり、排除されたり、あるいは失われてしまった夢や伝説、景観や建造環境であふれる迷宮都市をベンヤミン（の足どりと語り）が描き出していた、あるいは描き出そうとしていた、ということである。まさにこの点で、その名とともに「場所はパサージュにかわる」のだ（ド・セルトー 1987: 221）。ベンヤミンは固有名をエントランスにして、都市の迷宮やモダニティの前史（深淵？）へ分け入ろうとしていたのである。

2.3. 都市の心理地理学——シチュアシオニスト

都市とは「人間が思い通りに自分の住む世界を改造しようとした試みの中でも、もっとも長続きをさせた全体としてももっとも成功した試みの成果」である、と述べたのはシカゴ学派のロバート・パークであった。この指摘を知ってか知らずか、「現在自分たちが手にしている方法、および、将来のその発展をもってすれば、都市環境を再整備することばかりでなく、ほとんど意のままにそれを改変することができる」と考えた集団がいる。それは、「ヨーロッパ諸国をおもな舞台に、芸術と日常生活、文化と政治の統一実践を目指した領域横断的な前衛グループ」——『スペクタクルの社会』で知られるギー・ドゥボールが主宰した——通称シチュアシオニストである（南後 2006）。

この活動のなかでも特に有名なのは、一定の時間、日常性を断ち切り、場の状況に身

を任せる、「漂流」と呼ばれた実践である。

シチュアシオニストのさまざまな手法のなかでも、漂流という手法は、変化に富んだ環境のなかを素早く通過する技術という様相を呈している。漂流の概念は、心理地理学的性質の効果を認めること、遊戯的——創造的行動を肯定することから分かちがたく結びついており、その点において、それは旅や散策のような古典的概念とまったく逆のものである。

漂流は都市社会における実験的行動の様式である。それは行動様式であると同時に認識の手段であるが、とくに心理地理学と統一的都市計画の理論のあらゆる場面に姿を現す。

ドゥポールらは小規模な実験的漂流にとどまらない、直接的な介入の必要性をも認めるのだが、その際、有効になると想定されたのが「意識的に整備された環境かそうでないかにかかわらず、ある地理的環境が情緒的な行動に直接働きかけてくる、その正確な法則と効果についての研究」、すなわち都市の心理地理学であった。むろん、この心理地理は「空中写真や地図の読解、統計・グラフ、社会調査の結果」から理論的に探究されるとはいえ、すでに指摘されたように、都市の「心理地理」を認識するには「漂流」という実践が不可欠であると考えられていた。つまり、「漂流」の観点から見た場合にのみ、都市に存在する「心理地理学的な起伏」が把握されるのである。それは、彼らの都市計画批判における理論と実践の節合であった。

彼らの実験で有名なのは、ゾラの『パリの胃袋』で名高い中央卸売市場があった「レ・アールの心理地理学的描写の試み」である。レ・アールは「パリの遷移地帯に属している」という一応の認識が示されるとはいえ、ある女子学生が一年間に実際にたどったすべての道筋を描き出すショーンパール・ド・ローヴェの社会空間研究（その軌跡からは学校―自宅―ピアノ教室を結ぶ隙間のない三角形が浮かび上がる）もろとも、「バージェスがシカゴについて持ち出した、同心円状に限定された地帯ごとに社会的活動の分布が見られるというような理論でさえも、漂流の進歩には何の役にもたたないことは疑うまでもない」として、シカゴ学派とは一線を画している。

「都市ネットワークの裂け目、ミクロな環境の役割、行政上の地区とは完全に別の基本単位」（＝心理地理）を炙り出す漂流とは、オルタナティブな社会空間の探究であったと言ってもよい（ほぼ同時期に英国の地理学者アン・バットイマーもまた、「社会空間」を研究していることが注目される）。

ところで、繰り返しになるのだが、「心理地理」とは、「意識的に整備された環境かそうでないかにかかわらず、ある地理的環境が情緒的な行動に直接働きかけてくる」ような状態のことである。このような人と場所との情動的な結びつきを、人文主義地理学者イー・フー・トゥアンは「トポフィリア」という造語で指し示した。社会のスペクタクル化、それは偽物・借物の景観が埋め込まれることで場所の個性が失われる「没場所」

化の過程でもある。どちらかといえばマルクス主義地理学と親和的なシチュアシオニストの言説が、人文主義地理学派と場所の（詩学というよりは）政治学において接近している点は、とても興味ぶかく感じられる。

2.4. 都市のメンタルマップ——ケヴィン・リンチ

ところで、多くの書き手が特定の都市を初めて訪問した際の印象を記している。都市を体験するということは、それだけその人の思考を刺激し、個人史にはっきりと刻み込まれる出来事ということなのだろう。もちろん、先に触れたベンヤミンもその1人であるのだが、モスクワ訪問後には友人に宛てて「ぼくがとにかくその都市のなかで、その都市と格闘して過ごさねばならなかった2ヶ月間は、それでもぼくに、他では得られようのない経験を与えてくれた」と記し（ベンヤミン 1975: 248）、マルセイユについては「わたしはほかのどんな都市とも、これほどに格闘したことがなかった」と告白するなど（ベンヤミン 1972: 18）、彼にとっての都市の体験とは、言わば不確かで危険な邂逅でもあったようだ。

こうした他者としての都市との邂逅は、なにもベンヤミンだけが経験したわけではない。たとえば、アナール学派の泰斗フェルナン・ブローデルは、自らが1934年に初めてヴェネツィアを訪問した時の印象を思い起こし、「はじめてこの町に近づく無垢な旅人」のために、と言って次のように説く。ヴェネツィアには「幾何学的都市秩序は存在しない」ので、「最初の出会【一瞥】」でこの都市を理解することなどおよそ不可能である。それは、ヴェネツィアが全体としてあるのではなく、部分部分（島々）の総和によってはじめて都市となるような、さながら迷宮的集合体であるからにはかならない、と。しかしながら、十回と方角を間違える経験を繰り返してなおヴェネツィアの街路や公園を行き来し、他者に耳を傾けることで、「ありとあらゆる言語＝表現の大全」とでもいべきヴェネツィアをよりよく理解できるのだという。

ここで関心が持たれるのは、ベンヤミンにも相通じる、ブローデルの以下のような考え方である。人はなじみのない都市を訪れるという「断絶」を経験することで、日常性や習慣性が破壊され、さまざまな事物が「よく知らぬものへ〔と〕転落」するが、かえってそうした「幻想や夢に近い非現実感」、言い方を換えれば「異郷感」ないし他なるものに対する「奇異感」によって、「ヴェネツィアの魅惑、神話、誘惑」が生み出されるのだ、と。まさにこの感覚によって、旅人はヴェネツィアに心惹かれると同時に、不安をかきたてられもするのだ。

とはいえ、見知らぬ都市を初訪問する際には、別様の「不安」もつきまとうのではないか。

ある暑い日の午後、イタリアの小都会の、人通りの少ない、未知の通りをぶらぶら歩いて

いた私は、とある一角に踏み込んだが、そこがどういう性質の場所であるかは一見してすぐにわかった。小さな家々の窓に見うけられるのは、化粧した女ばかりだったので、私は急ぎ足に、すぐ次の角をまがってその狭い通りを立ち去った。ところが、しばらくのあいだ、道を知らず歩いていると、突然またしても自分がさっきと同じ通りにいることに気づいた。そうなる私の姿は人眼を惹きはじめたので、急いでまたそこを遠ざかったのだが、急いだ結果は、新しい廻り道をしたあげくに三度同じ通りに入りこむことになっただけであった。

3度にわたり売春街に迷い込んでしまったこの人物は、「不気味」としか言いようのない感情にとらわれたと述懐する。なるほど、こうした体験もあり得ない話ではないだろう——ちなみに、これはオーストリアの精神分析学者ジークムント・フロイトのジェノバでの体験である。

もうひとつ、今度はある人物の上京談を引用しよう。

渋谷駅には景色がない。そう気が付いたのは今から20年ほど前。関西から上京したての僕は青山の広告プロダクションに勤めていた。／なぜそんな発見に至ったかという、仕事帰りに渋谷で乗り換えるたび、どうもイライラするのだ。なぜか。ホームでなにも見えないのだ。人の波に隠されて駅構内の全景がつかめず、せいぜい数メートル先を目安に目指す方角に進むしかない。あまりに人が多いのだ。／そうか、全体像を把握できないというのは、こんなにイライラすることだったのか。そう気が付いた僕は、では一体、東京とはどんな全体像をしているのかと思った。(浅暮2005)

「全体像を把握できない」ことに苛立ちを感じたこの人物——作家の浅暮三文——は、ある日、意を決して「東京タワーに登っ」た。「とにかく高い場所から一望すればおおよそその様子がかめめるはずだ」、と。全方位、視野が途切れる先まで建物がうちつづく風景に圧倒された男は、部屋にもどってからもなお東京都の地図を開き、あらためてその捉え難さを実感したという（こうした体験は、都市を探究する地理学者にもよく見られることについては、後で触れることにしよう）。

全体像を把握できない不安、高みからの一望という見方は、ある都市論の著作を想起させもする。それは、都市の美しさを「読みやすさ legibility」にあると指摘したケヴィン・リンチの『都市のイメージ』（1960年）である。彼は著作の冒頭で次のように述べている。

環境の中の神秘とか迷路とか意外さのなかにも、かなりの価値があることは認められなければならない。……しかし、これには2つの条件が必要である。第1に、基本的な形態や方向を見失う危険、つまりそこから抜け出せなくなってしまう危険があってはいけない。意外さというものは一定の枠組の中で起こるべきであり……迷路や神秘は、さきにつきつめて調べればやがて理解できるような形態をそなえていなければならない。

このように述べるリンチは、さらに一步踏み込んで次のように主張する。すなわち、「迷った lost という言葉は、単なる地理的なふたしかさというよりもはるかに重大な意味を含んでいる。それは徹底的な不幸を意味するのである」と。いかにも都市計画者らしい主張ではあるが、なにゆえ「不幸」なのか。そこには、都市空間の地図を（頭のなかで）作成できないとき、人は都市の経験から疎外されてしまうのだという信念が見える（この点に着想を得て、フレドリク・ジェイムソンはグローバル化の各局面における「認知地図作成」の必要性を説いた）。リンチの都市のイメージ論には、都市の全域 global／局所 local をめぐる問題系が構成されていたのである。

リンチにとって都市に必要なのは、諸個人が全体のなかで各自の位置を簡単に把握することのできる空間構造である。都市の全域／局所の双方がともにイメージされやすいことが求められるのだ。そのように読み取りやすい環境（つまり、秩序のある環境）こそ、まさに「大きな座標系として、あるいは、行動、信念、知識などを組織するものとして役立つ」というのである（リンチのこうした考え方は、記号論者ロラン・バルトに影響を及ぼしたことで知られている）。

ここで、リンチと同じ「読みやすさ」をキーワードにして都市計画批判を展開したルフェーブルの議論は想起されてよい。ルフェーブルは『空間と政治』のなかで、次のように述べていた。

視覚的な読みやすさは、グラフィックな読みやすさ、エキリチュールの読みやすさよりも、はるかに巧妙で、しかも畏にかけられた（「畏をかけている」とも書くべきだろう）ものである。あらゆる読みやすさは貧しさからやってくるものだ。

この指摘は、以下でも繰り返し登場することになる。

2.5. 参照枠としての近代化

ところで、エドワード・ソジャは、1830年代から現在にいたるまでの資本主義の「近代化」過程を四つの局面として時代区分している（ソジャ 2003）。ソジャの言う「近代化」とは、「具体的な形態をもった空間—時間—存在という重要な再構成物を生産するために周期的に加速される社会再編の連続的な過程」であり、各局面は概ね以下のようにならめられている。

- ①第1の近代化：1848年から1851年の「革命の時代」（ホブズボウム）を折り返し点とする19世紀中葉の競争的な産業資本主義の古典時代。
- ②第2の近代化：世紀末を折り返し点とする（1880年頃から第1次世界大戦まで、あるいはパリ・コミュン敗北の余波からロシア革命にいたる）、企業の独占による内包的強化と帝国主義的な外延的拡大の時代。
- ③第3の近代化：ロシア革命から1960年代末にいたるフォーディズム、ないしは官

僚主義的な国家管理の時代。

- ④第4の近代化：1960年代末にはじまるポストフォーディズム、ないしはポストモダンの時代。

この一連の「近代化」に対する、文化的、イデオロギー的、再帰的、理論形成的な応答を、ソジャは「モダニズム」と定義する。すなわち、「同時代のコンテキストが大きく変化したことを前提に、今、何をすべきかという挑戦的な問いに直面した際に動員される、状況に応じた社会運動」であるのだ、と。モダニズムが「反応の形式」であるという認識は、「近代化」の各局面が新しいモダニズムの母胎となること、そして資本主義的モダニティの変化に応じて社会理論もまた再構成されるということを含意している。つまり、近代化の4つの局面に対応して批判的社会理論もまたその様態を変化させてきたのである。

すると、都市論のあり方もこの「反応」の一形式として読み直すことができるかもしれない。だが、ソジャも認めるように、都市内部の一連の空間編成が累積的である——つまり各々の局面はそれ以前の各時期の地理が刻み込まれており、既成の空間的分業は消失するのではなく選択的に調整される——ように、都市論の編成もまた累積的かつ偶発的な節合の可能性に開かれていることだろう。決定論に陥らないかたちで、こうした視点から都市論の系譜をたどることは今後の課題としなければならない。

3 時間地理学から空間の実践へ

3.1. 時間地理学とその批判

フランスの文化史研究者ミシェル・ド・セルトーは、地理学の主題とも関わる「空間」と「場所」について、両者を区別するために「場所」を以下のように定義している。

場所というのは、もろもろの要素が並列的に配置されている秩序（秩序のいかんをとわず）のことである。したがってここでは、2つのものが同一の位置を占める可能性はありえないことになる。ここを支配しているのは、「適正」かどうかという法則なのだ。つまりここでは、考察の対象になる諸要素は、たがいに隣接関係に置かれ、ひとつひとつがはっきり異なる「適正」な箇所におさめられている。場所というのはしたがって、すべてのポジションが一挙にあたえられるような布置のことである。そこには、安定性がしめされている。（ド・セルトー 1987: 242）

ド・セルトーの定義によると、人間や事物が1つの「位置」に同時に存在——共現前——することはあり得ない。つまり、特定の「位置」はつねになにものかに占有されており、その並列状態（＝「布置」）が「適正」であるときに示される安定性が場所の特徴ということになる。しかしながら、その布置が「適正」でない場合も生ずるはずだ。

というのも、なにものかに占められた「位置」をめぐる、相異なるものが接触し係争するとき、そこには、場所の安定性をゆるがす物理的な力関係が発生する、つまり「動き」が生じるからである。そして、この動きが交差するところを、ド・セルトーは「空間」と定義する。

地理学の主題図たる地図が、「場所」をめぐる生じる「空間」の意味と権力関係を表現し得ないことは明白である。実のところこうした地図表記法への懐疑が、ときに行動論的研究の枠組みでしか捉えられない「時間地理学」を、スウェーデンの地理学者トルステン・ヘーゲルストランドが提唱する契機になったという（杉浦 1989: 176-177）。

ヘーゲルストランドの時間地理学において、諸個人は、空間移動を通じて時間を消費する目的をもった行為主体とみなされる。個人史（誌）は、日常のルーチ的な移動から（例えば、家から職場・学校へ、そして帰宅）、生涯のさまざまな段階における移住（例えば、田舎での幼小期、大都市での専門的な訓練、結婚と郊外への移動、田舎への隠居）にいたるまで、「時間—空間における生活経路」として図表的に描くことができる。つまり、そのような個人史（誌）の考察を通じて、時間—空間的な行動の原理を探究するわけである。

この枠組みにおいては、空間と時間は、なんらかの社会的な「企図」を実現するために諸個人が引き出さねばならない資源であり、例えば、その有限な時間資源と「距離摩擦」は、日常的な移動を制限するし（＝物理的な能力の制約）、食事や睡眠などの時間も欠くことはできない（＝生理的な能力の制約）。このような制約は、個人の到達可能範囲を図上で「プリズム」として規定し、そのなかにはアクセス可能な「停留点」（たとえば、工場や商店のように、労働や買物のような特定の活動がなされる場所）の布置を貫通する最適な時間—空間経路（日経路）が含まれることになる。したがって、生活経路はこうしたプリズムの連鎖からなっているものとみなすことができる。

また、つねに社会的な企図には、諸個人（間）の社会的取り引きや生産・消費を成立させるための特定の場、つまりひとつの停留点に複数の時間—空間経路が交わる必要がある。これは「結合の制約」と呼ばれ、個人が、いつ、どこで、どのくらいの時間を使って、生産・取り引き・消費をおこなうために他の人に会ったり、道具や資材を集めなければならないかを規定している。しかし、個人はプリズム内のどの場所にも自由にアクセスできるわけではなく、規制・法律・習慣といった「管理の制約」が、特定の時間—空間「領域」におけるアクセスの条件および行為様式を規定する。

かくして、諸個人の経路の集合（「束」）は、相互に作用する制約のもとで、諸個人や集団が特定の計画を実現するために利用した「停留点」や「管理領域」の地理的パターンとして現われるものと理解される。

以上のようなヘーゲルストランドの「時間地理学」モデルを知ってから知らずか、

ド・セルトーは時間—空間的な行動を「軌跡」によって「表象」する試みを別様に提示していた。すなわち、

〔日常の実践を考察するために〕わたしは「軌跡」というカテゴリーに依拠してみた。これなら空間のなかでの時間的な動きを、すなわち移動してゆく点の通時的継起のまとまりを示せるだろうし、これらの点が共時的ないし非時間的なものと想定された場所にえがきだす形状を示すようなことはないはずであった。……街を歩く歩行者のたどる道筋は平面上に描きうつすことができる。(ド・セルトー 1987: 99)

このように、ヘーゲルストランドに類似する方法を構想したド・セルトーであるが、「軌跡はまさに描きだされ……時間なり動きなりが、目で一瞥でき、一瞬のうちに読みとれる一本の線に還元される」がゆえに、「このような『表象』では十分とはいえない」という。たしかに、ヘーゲルストランドの図式と同じく、「どのように諸個人の日々の生活が時間と空間において織り成される」かを描き出す「このような『平面化』は実に便利なものだが」、まさに「場所の時間的分節を……点の空間的配列にならべかえてしまう」がゆえに問題が起こるのだ。なぜか。

ひとつのグラフはひとつの操作の平面化である。ある一瞬と「機会」とに結びついてきりはなすことができず、それゆえ非可逆的な（時間はもどらないし、とりのがした機会はずっとこない）実践が、可逆的な（ひとたび表の上に描かれると、どちらからも読める）記号におきかえられてしまう。つまりそれは行為のかわりに軌跡をおきかえ、パフォーマンスのかわりに遺物をおきかえることだ。それは行為やパフォーマンスの名残りでしかなく、その消滅の記号でしかない。こうした軌跡が前提にしているのは、あるひとつのもの（この一筋の線）をもうひとつの（機会と結びついた操作）ととりかえうということである。それは、空間の機能主義的管理が効果を発揮するためにおこなう還元作用に典型的な「取り違い」なのだ。(ド・セルトー 1987: 99-100)

つまり、ド・セルトーは「時間地理学」における「表象」の形式に孕まれる権力性を問い、「これとは別のモデルに依拠」することをすすんで選択する。この時、「もっとも適切な基本シェーマをしめしてくれるように思われる」のが、「戦術と戦略の区別」であった。

3.2. 「戦術」と「戦略」

ド・セルトーの「基本シェーマ」たる「戦術」と「戦略」が、時間地理学的な枠組みへの批判から生じていることは興味ぶかい事実であるが、ここであらためてその区別を整理しておこう。

彼は「戦略」をつぎのように定義する。それは「ある意志と権力の主体（例えば、企業、軍隊、都市、制度など）が、周囲から独立してはじめて可能になる力関係の計算（ま

たは操作)」である。そしてその戦略は、例えばフォーコーが示す一望監視的な装置が作用できるような「ある権力の場所（固有の所有地）をそなえ、その公準に助けを借りつつ、さまざまな理論的場（システムや全体主義的ディスクール）を築きあげ、その理論的場をととして、諸力が配分されるもろもろの場所全体を分節化しようとするような作戦」である。この文脈でいえば、たとえば、プランニングによる空間の分割は「ある一定の場所からの一望監視という実践を可能にし」、その実践は対象である生活世界——具体的空間——を管理可能な支配的空間にかえる。

ド・セルトーは、以上のようなフォーコー的な権力地図やその「戦略」のこまかな輪郭にたしかに感心しているものの、かれ自身の目的は、戦略が作用する空間（具体的空間）をふたたびわがものにしようとするもののやり方、そのおびただしい実践を発見することにある（Gregory 1994b）。それこそが「戦術」とよばれる領域にあたる。

「戦術」とは「自分のものをもたないことを特徴とする、計算された行動」である。戦術の空間とはもっぱら「他者の空間」であり、けっして固定されることなく位置の自由がきき、不可視なものである。たいてい戦術は、戦略が生産し基盤目に区切り、押しつけてくるこの権力の空間を、利用し、あやつり、横領することしかできない。それは、権力の監視内での行動であり、管理された空間内での動きといえる。つまり、具体的空間にそなわる微細で日常的な手続きであり、そうした監視のもとにおかれながら、秘密裡に、そして散在しつつゲリラ的に、ふと情況が隙をあたえるならば、ここぞとばかりに好機をとらえる技である。およそ、歩行や会話、そして読書、買物から料理にいたるまでのすべての日常的な空間の実践は、この戦術の領域に含まれる。そして、監視の網目が細くなればなるほど、戦術的な手続きも、よりミクロになり、「実践は、システムによって決定されるのでもなければ、捉えられるのでもなく、そのなかにおいて発展する」。そしてド・セルトーは、戦術がおりなす複雑な地理を実質的に意味のある「日常生活」の構成と考える。

このようなド・セルトーの戦略と戦術の区別を、グレゴリーの「権力の目」にならって整理するとより明瞭になるかもしれない。グレゴリーはアンリ・ルフェーブルの空間の生産に関する議論の一面を図1のように、抽象的空間の生産による「日常生活」の空間（具体的空間）の植民地化としてまとめている（Gregory 1994b: 401–406）。抽象的空間は、空間の断片化と均質化によって特徴づけられる、あらたな空間の種をはらむ現代資本主義の空間であり、卓越した交換価値の空間である。図1によれば、この抽象的空間が、権力の空間的グリッドの押しつけ（領域性や所有など）に依拠した官僚化・商品化という重層的な空間的实践をととして、さらに、空間諸科学の言説（主流のプランニングや都市計画）および都市空間のスペクタクル化、監視の地理などを含む空間の表象をととして、具体的空間を植民地化する。

具体的空間は日常生活の空間であり、グレゴリーは、日常生活をふたつの側面からと

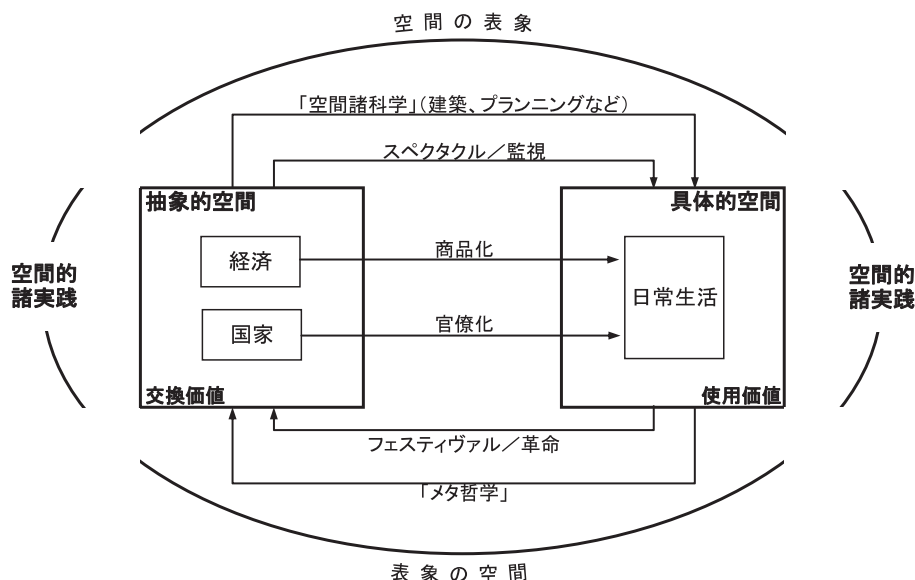


図1 グレゴリーが描く「権力の眼」

らえている。つまり、「経済および国家によって枠付けられ、束縛され、植民地化される」（ルーチン的な空間的实践の）領域であると同時に、「モダニティの疎外によって触れられていない（伝統的な）空間的实践の軌跡と記憶」の領域である。空間の歴史を描くルフェーブルの目的は「日常生活を再生し、取り戻すこと」、そしてその方法を「日常生活のなかに想像すること」である。事実、彼は抽象的空間のヘゲモニーに対抗するポテンシャル（示差的空間を生産する役割）も指摘している（Stewart 1995）。さらに、図1にしたがえば明らかとなおり、具体的空間は抵抗やアクティヴな闘争（「フェスティヴァル」）を含む空間的实践や「対抗言説を生産しオルタナティブな空間的イマジナリーを創出する表象の空間の起点でもある」。ゆえに、具体的空間はいまだに「主体の空間」であり、抵抗の可能性をはらんだ使用価値の空間なのである。

このようにみえてくると、「空間の表象」を「固有の場」として日常生活を植民地化する手続きはド・セルトーがいう「戦略」に（事実、ド・セルトーは「テクノロジーによる植民地化」に言及している）、そして「具体的空間」を起点として「表象の空間」を生産する実践は「戦術」に対応していると言えるだろう。

ド・セルトーがこの「戦術」の領域から慎重にとりだすのが、「空間的实践」としての「歩行」であった。

3.3. 歩行者の足どり

ヘーゲルストランドのように、ド・セルトーは諸個人の「物語」を「地面」のレベルから、この場合、都市における「人びとの足どり」からはじめる。「足どりの戯れは

空間細工だ」。足どりの戯れが、さまざまな場所から意味の糸を紡ぎだして織り上げ、社会的な空間を創出する。フーコーに依拠して、ド・セルトーは、「首尾一貫性をそなえ全体化をはかろうとする空間のテクノロジー・システム」(=「空間の表象」)を、「歩行者たちの運動」(=「空間の実践」)が、「ありふれたものの言いかたのなかから寄せあつめたつぎはぎの話、語られない部分がなにかの社会的実践を象徴しているような、断片的で暗示的な物語」と理解される「神話的な構造をもった道筋」(=「表象の空間」)に日常的に置きかえている、と考える。

こうした観点からみれば、歩行者たちの運動は、「それがあつてはじめて都市が真に都市となる現実的なシステム」だが、かといって「どこか物理的に収納できるような場があるわけではない」システムのひとつをカタチづけている。そうした動きが空間をつくりだしてゆくのだから。(ド・セルトー 1987: 209)

つまり、「空間の実践」とは「既成秩序の基本要素になんらかの操作をくわえること」であるから、実践としての歩行は「都市工学システムの規定するある種の原義」になんらかのずらしをくわえる操作である。

人びとの足どりは、どんなに一望監視的に組織された空間であろうと、その空間に細工をくわえ、その空間を相手にして戯れている。その身ぶりは、そうして組織化された空間に縁遠いものでもないし(どこかよそを通過してゆくのではないから)、といってそこに順応する身ぶりでもないのだ。……その足どりは、それじたい、次々とふりかかってくる出会いやチャンスのうみだす結果なのであり、そうした出会いやチャンスはたえず歩きかたに変化をあたえ、その足どりを他者の刻銘に変えてしまう。(ド・セルトー 1987: 216)

ここで都市と歩行の関係の特徴は、「矛盾した運動」として捉えられそうである。つまり、歩行者は支配・管理・制約の総体としての都市に対峙する。というのも、都市の空間秩序は「さまざまな可能性(歩きまわれる広場など)と禁止(それ以上前進できない壁など)の総体を組織して」おり、歩行者の身ぶりや挙措を規定し、かれらが生産する空間の意味を可能なかぎり厳密に支配しようとするからだ。ところが、歩行者の身ぶりは、選択的にそのうちのいくつかを現働化するにすぎない。いやむしろ、歩行者は、それらをずらしたり、別のものをつくりあげてみたりもする。というのも、いわば歩行者の漂流でもあり即興でもある横道は、いろいろな空間要素のなかでも、とくにどれかひとつに愛着をしめしたり、勝手に変えてしまったり、かと思えば見捨てて放っておいたりするからだ。要するに、歩行者は「既成秩序の定めた可能性のうちそのいくつかだけしか実効化しないし(ここに足を運んでも、あちらには行かない)、また他方で可能性の数をふやしたり(たとえば近道やまわり道をしたりしながら)、禁止の数をふやし

たりする（たとえば、合法的ないし義務的にきめられた道は歩かないようにして）」など、数限りないその術策で狡智にたけた抵抗を続けるのである。

このようにみえてくると、冒頭で引いた「場所」と「空間」の定義の意味がおのずと明らかになってくる。いま一度整理しておく、**「場所」**は、「もろもろの要素が並列的に配置されている秩序」であり、「2つのものが同一の位置を占める可能性」はなく、それゆえ、「すべてのポジションが一挙にあたえられるような布置のことである」。それに対して、「方向というベクトル、速度のいかん、時間という変数を取りいれてみれば、空間ということになる。空間というのは、動くものの交錯するところなのだ。空間は、いってみればそこで繰り返りひろげられる運動によって活気づけられるのである」。「要するに、空間とは実践された場所のこと」だ。（「場所」としての）都市の街路は、歩く者たちの実践によって「空間」に変わる。ハーヴェイにならって言えば、ド・セルトー流の「場所と空間の弁証法」と言えるだろう。

3.4. ストリートの風景

『都市のイメージ』（1960年）の出版から3年後、やはりアメリカの諸都市を舞台とした注目すべき都市論があらわれた。日本では建築家の黒川紀章の翻訳によって知られるところとなったジェーン・ジェイコブズの『アメリカ大都市の死と生』である。ニューヨーク、ピッツバーグ、フィラデルフィア、ボルチモア、ボストン……を参照している点、都市計画との関わりを明確に示している点、さらに論の起点を街路に置いている点で、『都市のイメージ』との共通性も感じられなくはない。

同書の冒頭には、「図版」に関する説明として、「われわれの回りにあるすべてがこの本のさし絵である。挿図のかわりに現実の都市をよく見てほしい。見ている間に、あなたはまた、聞き、ぶらつき、そして見ているものについて考えるだろう」という、とても印象的な文章が置かれていた。「現在行なわれている都市計画および再開発に対する一つの挑戦として書かれたもの」と自ら位置づける著者ジェイコブズの立ち位置が、この「図版」に対する注釈においてもっとも明確に示されているように思われる。

実際、彼女は都市の秩序を街路のなかに見いだしていたのだった。「この秩序はすべて動きと変化から成っていて、技術ではなくて生活そのものであるのだが、われわれはそれを都市の技術の形態だと呼ぶこともできるし、踊りになぞらえることもできる」。そして、彼女が「どの一部の場所を取り出してみても、常に新しい即興の踊りで充実させられている」と述べるとき、彼女は思いのほか、ド・セルトーの「空間の実践」論に接近している。

自身の暮らすハドソン通りで日常的に展開される「歩道バレエの光景」を書き記した後、その素描に次のような文章を彼女は補った。

私はハドソン通りに行なわれる毎日のバレエのシーンを実際より大げさに書いたかもしれない。なぜなら、紙に書くためには実際のシーンのごく一部を拡大しなければならないのだから。実際の日常生活はそんなものではない。実際生活では、必ずそこに起こる物事は連続していき、バレエは決して終わることがないのである。しかも大ていの結果は平和に解決され、その過程は楽しみでさえある。このような活気ある生き生きした通りをよく知るもののみが、通りの本来の姿を知るのである。(ジェイコブズ 1969: 67)

街路で繰り広げられる物事の連続性、なかでも歩行者たちの足どりの連続性をグラフ化したのが「時間地理学」であった。しかしながら、その連続性が1本の「軌跡」として表象されるがゆえに、人びとの社会的属性が看過されるのみならず、さまざまな機会と結びついた即興性が剥ぎ取られ、「機能主義的管理」が効果を発揮する舞台を整えるのである。ヘーゲルストランド自身が後に時間地理学を「死の舞踏」と呼ばざるを得なかったゆえんである。

都市誌の困難を十分に自覚しながら、喧騒に満ちた街路の「光景」を点描し、都市の管理主義にはおさまりきらない日常生活の遂行性を明るみに出したという点から、ジェイコブズの都市論を再評価することもできるだろう。

4 D. ハーヴェイの都市へのまなざし

1990年を前後する時期から、人文地理学でもポストモダンの転回が明確に意識されるようになった。ここではその詳細に触れることはできないが、一連の議論の過程で浮き彫りになったもうひとつの側面について見ておきたい。それは、『ポストモダニティの条件』のハーヴェイ、そして『ポストモダン地理学』のソジャの都市の見方(ways of seeing the city)があまりにもモダニズム的である、とされたことであった。以下では、まずハーヴェイについて、そして次章でソジャを含むロサンゼルス学派について取り上げる。

4.1. 休みなき分析者

1985年に出版されたハーヴェイの2つの大著——『The Urbanization of Capital』および『Consciousness and the Urban Experience』——は、「資本主義的アーバニゼーションの歴史と理論に関する研究」の姉妹書であり、その冒頭に冠された「はしがき」は、資本主義の歴史的—地理的な諸過程に関するマルクス主義的な理論構築への強い意志がひしひしと伝わってくる内容となっている。このことは、1989年に姉妹書を合冊したペーパーバック版である『The Urban Experience』にもしっかりと受け継がれていた。同書には、2つの姉妹書から「資本主義下の都市的経験」のありようを解釈するのに有用で一貫した理論を提示するという目的から選択された論文計8編と、1987年に発表されたボス

トモダニズムに関する論文1編が収録されたのだが、本書を特徴づけたのは『The Urbanization of Capital』の「はしがき」を下敷きにした16ページにもおよぶ「序論」の存在である。

「はしがき」と「序論」はともに、ハーヴェイの希求する強力なマルクス主義的メタ理論のあるべき姿、その構築の方法がわかりやすく示されているが、ことに注目されるのは、ハーヴェイが研究者として、どのように都市とかかわるのか、あるいはどのような見方を取るのかなど、都市を論じる際の構えがより直截に語られていることである。ここでは、ハーヴェイ自身の語りを通じて、ハーヴェイの都市へのまなざしの特徴を明らかにする。

2つの姉妹書は、『The Urbanization of Capital』が理論的で、『Consciousness and the Urban Experience』が思索的・歴史的であることは著者自身も認めるところであり、そうした側面を考慮してか「はしがき」には若干の異同がある。とくに顕著なのは、『Consciousness and the Urban Experience』において、ハーヴェイが研究者としてのみずからの立場を、『アメリカ印象記』を物したヘンリー・ジェイムズになぞらえて「the restless analyst」と位置づけていることである。ジェイムズ自身は「観察を本務」とする「不安な分析者」であるのだが、ハーヴェイの場合、かれのここまでの研究の軌跡およびそのあくなき探究心を鑑みると、「不安な／落ち着きのない」とするよりも、むしろ「休みなき分析者」あるいは「変わりつづける分析者」とすべきであろうか。「もっぱら想像することの興奮に身をゆだねながら、私はアメリカの将来に考えうる劇的な展開についての想像を無限に拡大していった——ということつまり、未来の光景のあらゆる面について、想像をたくましくした」と述べる「神話的な人物」にハーヴェイが「感銘」を受けるのは、まさにその分析者には、社会的・文化的・政治的・経済的なあらゆる生活の側面を貨幣価値・利益計算によって均質性・普遍性へと容赦なく変質させる資本主義をものともしない「知的スタンス」がそなわっているからである。

そこから2つの姉妹書を、「都市シーンの休みなき分析者の作品」とみずから位置づけるハーヴェイは、両書における理論構築は、「抽象においてなされるのではなく、経験・行為・概念形成・弁証法的理論化のあいだのたえざる対話」においてなされねばならないとし、理論と経験は形式的に分割されて論じられつつも、その両者の結びつきにこそ新しい洞察の契機があると考え。つまり、われわれはつねに「あるなんらかの研ぎすまされた概念装置」あるいは理論・想像力によって世界にアプローチし、それによってはばひろく出来事や経験を解釈するが、「予想もしないやり方で想像力にぶちあたり、すでに受け入れられている思考や行為を激しく揺さぶる」「いくつかの契機・出来事・人びと・経験があって……こうしたものに意味を与えるためになんらかの特別な想像力あるいは理論をもって飛躍することを要求する」こともある。ハーヴェイにあって「休みなき分析者」とは、このような「経験と想像力の予想もつかない衝突」を「新

たな洞察」の糧とする人物、「都市生活や都市プロセスのアクティブな探究者」にほかならない。

日常生活で経験される「偶然の出来事」は、「創造的な衝突の瞬間」であるがゆえに、ハーヴェイにとっての都市とは「予期せぬ場所」(ルフェーブル)なのである。同じ文章で、ハーヴェイは都市を「空間の生産と政治的意識を分析するためのいくつかの空間的スケールのうちの一つにすぎない」としているが、それ以上のものであることがはっきりとわかる。

したがって、『Consciousness and the Urban Experience』においては、分析者としてのみずからの主体性や個人的な経験が重視されている。このことは、たとえば以下の文章から知ることができる。

わたしは街路をぶらつき、フラヌールを演じ(けれども、あまりに目的意識に満ちすぎていて、本当にそのたぐいのものではないのだが)、人びとと互いに見あい、会話を立ち聞きし、地方紙(とくに、われわれ知識人が見下しているであろうゴシップ記事や犯罪報道)を読む。地域の政治活動(労働ストライキ、地代管理キャンペーン、政治活動センターの建設)や国際的な政治的共同は、より集合的な次元を経験に付与する。それから文学もある。休みなき分析者は少なくともそれらすべてを試してみなければならないし、提起されている考え方や情報と格闘し、ときにはそれらを提起した人と知的な戦闘において激しくたかかわなければならない。……小説、演劇、詩、歌、絵画、落書き、写真、建築の図面と計画……これらすべてが手がかりを与えてくれるし、潜在的な意外性を含んでいるのである。

「経験は多くの装いをまとうてあらわれる」がゆえに、かくのごとく「フラヌールを演じる」ことをもいとわず、日常生活で生じる「偶然の」経験を思索・省察することで理論を構築していこうとする、休みなき分析者・ハーヴェイの姿勢がここにはある。

このようにみえてくると、ハーヴェイの「都市的经验」(という語法)は、資本主義的な都市空間形成における「生きられた経験」を指していること、さらに、ヴァルター・ベンヤミンの言葉を借りるならば、「経験は偶然の産物であり、本質的な未完結性を帯びている……知るに値することの収集は基本的に完結不可能である」がゆえに、「探究する者にとっては、『けっして探究の終わりはない』……遊歩者〔フラヌール〕にとっては『必ずまだまだ見るものがある』」, という意味での「休みなき分析者」の経験を指しているのだ。

4.2. 都市へのまなざし

『The Urban Experience』の「序論」は、「はしがき」の2倍にもおよぶそのヴォリュームもさることながら、なによりもまず、『Consciousness and the Urban Experience』におけるジェイムズの「休みなき分析者」への言及と対置するかのごとき、ド・セルトーの引用にはじまる分析者ハーヴェイの立場表明が興味ぶかい。ハーヴェイは「序論」を、と

でも印象的な次のような問いかけからはじめる。

なじみのない都市に着いたとき、手頃な高台にのぼり、街路や建物の複雑に入り組んだ景観やそのなかでひっきりなしに動いている人間の行動を見下ろす機会を拒む人がいるだろうか。なぜわれわれは、長く住んでいる人がめったに考えないことを、そのようにしたがるのだろうか（訪問者が到着したときを除いて）。またそうすることでわれわれは何を得るのだろうか。

この問いに答えるために、ハーヴェイは、今ではよく知られるところとなった、次のようなド・セルトーの文章を参照する。

世界貿易センターの最上階にはこぼれること、それは都市を支配する高みへとはこぼれることだ……この海のうえにあがるイカロスとなり、どこまでもはてしなく続く動く迷路にひとを閉じこめるあのダイダロスの術策を忘れることができる。こうして空に飛翔するとき、ひとは見る者へと変貌するのだ。下界を一望するはかな高みに座すのである。この飛翔によって、ひとを魔法にかけ、「呪縛」していた世界は、眼下にひろがるテキストに変わってしまう。こうしてひとは世界を読みうる者、太陽の《眼》、神のまなざしの持ち主となる……マンハッタンへのさきに立つ 420 メートルのタワーは、読む者をつくりだすフィクションをいまも変わらず築きあげているのであり、そのフィクションが、都市の錯綜を読みうるものに変え、変転たえまないその不透明性を動かぬ透明なテキストに変えてしまっているのだ。

ハーヴェイは、この文言の一部にのみ依拠して、高みからの眺めを「見る者 voyeur」のパスpekティヴとよび、そこから「都市全体」（とかれが信じるもの）を見下ろすときの経験を記述する。

ミシェル・ド・セルトーは、ニューヨークの世界貿易センターの最上階にのぼって自分の考えを語る際に、ひとつの面白い答えを示してみせる。高みにのぼることとは、われわれを都市の理解や街路生活のざわめいた動きから引き離し、一瞬であろうとも、われわれが「見る者 voyeurs」になることを可能にする、というのである。この高さによって「ひとを魔法にかけ、『呪縛』していた世界は、眼下にひろがるテキストに変わってしまい、ひとは世界を読みうる者、太陽の《眼》、神のまなざしの持ち主となる」。われわれは、そのような眺望の効く位置ではもはや都市に呪縛される存在ではなく、想像力において都市を所有することができるのだ。

ところが、これもまたよく知られているように、ド・セルトー自身はそのような眺望の効く有利な位置を、はなから明け渡してしまうためだけにもちいている。すなわち、「そうした神をよそに、都市の日常的な営みは『下のほう』、可視性がそこでとだえてしまうところから始まる」と。そして日常生活の基本形態が歩行者たちの空間の実践（つまり歩行）にあるとし、歩く者たちの知は「神のような」まなざし、その全体知から逃

れ、それによって捉えられるものではない、と指摘する。

ハーヴェイとて、ド・セルトーの提示するふたつの都市の見方・経験をまったく無視しているというわけでもない。つまり、

そのような「神のような」都市の見方と街路生活の騒々しさととの間の関係は、じっくり考えてみたくなる。異なっているが、どちらのパースペクティブも十分に現実的である。現実の構築あるいは心的な構築において、それらが個々別々というわけでもない。まなざす目は、それが都市をひとつの全体として見るとき、街路経験から難儀して作り上げられた偏見や概念（都市という概念自体のように）、そして理論さえもひとつの全体的組み合わせにすることをなしとげる。それゆえ、高所からのわれわれの解釈は、さまざまな連想や推定に恐怖、そして欲望や願望をとまなうことになる。目はけっして中立的ではなく、「適切な」見方をめぐって多くの闘いがなされているのだ。だが、その連想や願望がどうであれ、都市を全体として見てきた、つまりひとつの全体として思い浮かべてきたわれわれには、高所からの眺めを考えることに特有の満足感がある。その後、街路生活の経験は新しい意味を獲得するのに役立つことはない。

見る者と歩行者の「パースペクティブ」は、どちらも「十分に現実的である」と主張される。しかしながら、ハーヴェイにとって、（ド・セルトーの主題である）歩行者のパースペクティブ・経験は、「通俗的でローカル化された街頭文化の醗酵を理解するための基礎を規定している」にすぎず、逆に「見る者」のパースペクティブ、その神のようなまなざしは、それが全体的であるという理由で、よりすぐれた都市の見方なのである。「高所からの眺め」に「満足感」をおぼえ、「街路生活の経験は新しい意味を獲得するのに役立つことはない」と言明するとき、「休みなき分析者」の姿勢は決定的に変化している。このことは、ダニエル・ベルが提示した、つぎのようなモダニズム的な都市の見方に対応していると言えよう。

都市を「知る」ためには、街路を歩いてみなければならない。しかし、都市を「見る」ためには、その全体像を知覚するために外側に出なければならない。遠くから見れば、高層ビルディングの群れが都市を「象徴」していることがわかる。その林立するさまは、見るものにショックを与え、そのシルエットは深く心に刻みつけられる。こういう視覚的な要素こそ、まさに現代の都市の象徴的表象である。

2つの著作に示されたハーヴェイの都市へのまなざし、その態度を、この文章に重ね合わせることもできよう。「シルエット」という「視覚的な要素」こそが「都市の象徴的表象」であるとする都市の見方については節を改めて考えてみたい。

しかしながら、「休みなき分析者」と「見る者」は、前者から後者への単線的な変容というわけでもなく、つねに地理学の最前線を開拓しつづけてきたハーヴェイには、そのどちらの形象の影をも引きずっているような印象を受ける。こうしたハーヴェイのイ

メージは、ある意味でかれ自身がそのようなモダニズムの両義性を体現していることに起因しているのかもしれない。

4.3. 都市表象の実践

ここであらためて「序論」におけるハーヴェイが、みずからの理論構築の様式を一連の視覚イメージをもちいて説明している、ということを確認しておこう。

本書に収録した論考は、都市の見方 (ways of seeing the city)、都市テキストの読解の仕方 (reading its text)、そしてわれわれが街頭で直面する幾多のそしてひとつの驚きを定位するための解釈的枠組みの見つけ方にかかわっている。しかしながら、都市プロセスを観察し、「想像力において都市を所有する」ための有利な立脚点＝眺望の効く位置 (a vantage point) を構築することは、われわれがもっともしんどい知的労働に携わることを意味する。そうすることで、日常の都市的経験がつねになりがちな多元的混乱を理解しつつ、われわれが都市を全体として理解できる理論装置の構築にたどりつけるのだ。

ここでのハーヴェイは、「voyeur」のパースペクティブを、「豊かで複雑な資本主義の歴史地理における都市空間形成の役割と同様に、建造環境の形成、建築デザイン、街頭文化とマイクロ・ポリティクス、都市の経済・政治にまでおよぶさまざまな事柄」を説明しつくせるマルクス主義的メタ理論と同一視しているようである。また別のところでは、この「voyeur」のパースペクティブが「さまざまな視点からの三角測量によって理論を構築し、さまざまな窓をとおして世界を考察する」ことの「メタファー」であるとも言い換えていた。そして、彼がド・セルトーに対立するのは、「世界との知覚的・現象学的関係」に依拠する「歩く者」のパースペクティブでは、たとえば「建造環境における資本の蓄積」を理解することは不可能であり、それゆえ「voyeur」的なパースペクティブをもって、それを「認知的に……理論化」するためであるという。

たしかに、見ることと視覚化とを単純に同一視することはできない、つまり「世界のなかに位置づけられた身体状況からの視覚が、必ずしも『上空飛翔』ないし『神の眼』の眺望に見えるものを見うるわけでもない」(ジェイ 1996) が、このことがまなざしへの批判を、視覚性の問題から後退させることを意味するわけでもない。つまり、「都市」を「全体」として眺めるときに味わう(ハーヴェイらの) 快楽は、短絡的にメタ理論と「voyeur」の力を同視することによって中立化できるものではなく、そのどちらもが社会性・制度性・政治性を帯びた構築物であるということを認識しなければならない。ド・セルトーが「voyeur」批判を、「このようなコスモスを読む恍惚には、いったいいかなる知の悦楽がむすびついているのだろうか」という問いからはじめたことは、むしろ当然のことだったのである。

ハーヴェイ自身もじゅうぶん承知しているはずであるが、さまざまなポジションで選

扱われる理論的フレームワークやスケールにもとづき生産される都市の表象や知の形態は、けっして中立的でもなければ没価値的なものでもない。しかし、ハーヴェイが選択し、「十分に現実的」とであると確信する「voyeur」のパースペクティヴは、ド・セルトーにしたがうならば視覚的幻想への接近なのである。

眼下にみはるかす巨大なテキストの群れは、ひとつの表象、目のつくりだす人為的産物以外の何であろうか。それは、空間の整備にたずさわる者、都市工学者や地図作成者たちが製作する複製の類似物だ。かれらの製図法もまた一種対象に距離をとる方法にはかならない。

ルフェーブルも述べているとおり、たとえば都市計画家の想像力は「幾何学的な抽象的空間に舞い上がり」、その「対象」である建造物や近隣地区、あるいは都市を、高所からあるいは距離をおいて眺めることで、都市の「表象」を生産する。この空間の「表象」は、より技術的で合理的なものへと変換され、その帰結は可読的な空間の創出と「視覚化の論理」のヘゲモニーである。そのようにマクロなスケールの実践で生産される表象の「視覚的な読みやすさとは……ブランク、すなわち最も貧困なテキストに他ならない」として、ルフェーブルが、空間を表面的なものへと還元する読み方を斥けるのは、それが「透明」であり、なんら問題を構成せず、「歴史と実践の双方をはぐらかし」、空間の「真実」——空間の生産によって生じる、あるいはそれを取り巻く政治的・経済的闘争——を隠蔽してしまうからである（Stewart 1995）。

このようなド・セルトーやルフェーブルの批判の文脈で考えるならば、「想像力において都市を所有する」こととは、理論的／視覚的な都市の「想像上の全体化」であり、その「voyeur」が目にする「都市全体」とは、「〔日常的〕実践を忘れ無視してはじめてできあがる一幅の絵」に過ぎないのだ。

こうした批判は、表象のポリティクスの方向性を指し示す一例となると思われるが、ハーヴェイの議論でもうひとつ問題なのは（次節でみるようにソジャも同じであるが）、ド・セルトーが論じる「見る者、歩く者」に、高所／街路というふたつのレベルの都市の見方を対応させ、前述のとおり、そのふたつを比較し、みずからのメタ理論指向にフィットする前者を優先したことである。あるいは、グレゴリーのソジャに対する議論にしても、ソジャの都市へのまなざしを「voyeur」的であるとみなして批判するために、ド・セルトーが主題とする「日常生活」レベルを対置したにすぎず、「日常生活」論としての、あるいはソジャの都市景観論の読解の有効性はべつとし、批判それ自体の有効性はあまりなかったように思われる。つまり、街路レベルについても、その表象批判は可能であるし、レベルを設定するコンテキストにも留意する必要があるからである。

ここで確認しておきたいのは、以上に見てきたド・セルトーの議論は、都市のふたつのレベルでの「見方」を比較したのではなく、とくに「voyeur」に注目し、その見る

という行為自体の社会性と表象／知の生産を、ひとつの問いの領域として提示した、つまり表象のポリティクスの観点から捉え直したのである。

5 ロサンゼルス学派の都市論

5.1. 移動する都市論？——ロサンゼルス学派の形成

アメリカのノーベル文学賞作家スタインベックが、かつて「移住幹線道路」と呼んだ Rout66 は、1926 年の完成以来 80 年以上の歳月を経て、今やモニュメンタルな存在になろうとしている。だが、この道路を移動したのは、土地を離れてカリフォルニアへと向かう農民たちばかりではなかった。Rout66 には、もうひとつの貌があったらしい。それは、言わば、移動する理論の軌道とでもいうべき、この道路が果たした役割に拠っている。このような印象を決定づけたのは、「Rout66」という標識がほんやりと浮かんだ 1 枚の道路の写真を表紙に掲げる『From Chicago to L.A.』と題された論集であった（Dear 2001）。

一見、その表紙とタイトルは、1920 年代のシカゴから（1980 年代以降の）ロサンゼルスへと都市論の生成する場が移行したことを物語っているように思われる。だが、編者であるマイケル・ディアのねらいは単にそれを示すことだけではなかった。彼はシカゴ学派に対抗するロサンゼルス学派（以下、LA 学派）の形成とその意義を高らかに謳い上げているのである。

この学派の（明確な）出発点は、『社会と空間 Society and Space』誌で 1986 年に組まれたロサンゼルスの特集号に求めることができるかもしれない。この号に「ロサンゼルス——20 世紀後期の首都」と題するエディトリアルを寄せたのは、他ならぬソジャと同僚のアラン・スコットであったし、ディアもまたいち早くロサンゼルスのポストモダニズム論を展開していたからである。

LA 学派の都市論は、主としてカリフォルニア大学ロサンゼルス校と南カリフォルニア大学に籍を置くさまざまな論者の、それぞれ異なるアプローチにもとづくロサンゼルス研究の総体ということができ、その成果は、1925 年に出版されたロバート・パークらの『都市 The City』を思わせるスコットとソジャの編集した『都市 The City』に結実したと言ってよい（Scott and Soja 1996）。『都市』における LA 学派の課題は、彼らが目の当たりにした 1960 年代後半以降のロサンゼルス歴史地理のなかに、その変遷を生み出す動因を認識し、説得力のある解釈を示すことにあった。

5.2. ロサンゼルス（学派）の特殊性

長尾兼吉が指摘するように、LA 学派の都市論は、「ロサンゼルスの特殊性を抜きにして」語ることはできない（長尾 2006）。「特殊」とするからには比較の対象が想定さ

れているわけであるが、後述するようにそれはシカゴに範をとった都市像や都市観である。LA 学派の「主導者 conductor」と目されるディア、そしてソジャとスコット、さらに LA 学派批判の急先鋒であるフィリップ・エシントンらへのインタビューから構成された「新しい都市研究」は、「ロサンゼルスの特異性」（ひいては、LA 学派の特異性）を浮き彫りにする（Miller 2000）。

それによると、一貫して彼らは「ロサンゼルスが都市に関する多くの前提に異議をつきつける事例である」ことを主張している。たとえば、産業構造の転換を一義的に前提する「脱工業化社会」という考え方は、まったく間違っているのだと。ストゥーパーやスコットらの成果が示すように、アメリカ都市においては、たしかに「脱産業化」（なかでも、大規模かつ垂直に統合された、組立ラインからなる大量生産工場の斜陽）がつつんでいる一方、ロサンゼルスでは膨大なアンドキュメンティッドの労働者に依存した搾取工場を基盤とする製造業、ならびにハイテク産業とが同時に興隆、つまり「再産業化」している。それは、言わば「資本主義の新しいモデル（＝フレキシブルな資本主義）」（スコット）であって、伝統的な産業発展のモデルで捉えきれものではない。結果として、労働市場の中間層は空洞化し、逆に所得規模の最高部と最低部の双方が極端に膨脹するという「漏刻型経済 hourglass economy」が出現する。このような分業形態における二極化は、武装した守衛や高い壁で防御された郊外のコミュニティ、住宅の払底にとまなうインナーシティの過密な居住環境、そしてダウンタウンの要塞化する建造物とその周囲にひろがる絶望の景観とに映し出される。

こうした経済と生産空間の再編によって転形し、また逆に再編を促進しもする都市の空間性にいっそうの注意を払うのがディアとソジャである。2人は、スプロール化をとめないながら脱中心化する遠心的なメトロポリスの「典型」をこの都市に見て取った。むろん、前世紀の転換期以来、住民の一定階層と経済の諸部門とが都心を離れ（脱中心化）、郊外に新たな中心地が形成されつつけていること（多核化）を2人は認めているが、直近の「近代化」の局面、具体的には1970年を前後する時期にはじまる危機によって引き起こされた都市再編の根底には、ある決定的な変化があると指摘する。それは、大都市圏の縁辺に、工業団地や金融業の拠点、大規模な住宅地、そして巨大な消費・娯楽施設などが無定形に集積する再中心化の舞台が登場してきたことである。ソジャが「集中した分散化 concentrated deconcentration」とでも呼ぶべき都市のパターン化を指摘すれば、ロサンゼルスでは「もはや中心が後背地を編成することはない」とディアは主張する。

以上のような議論を受けて、ロサンゼルスには「都市性の新しい（ポストモダンの）形態」が出現しており、もはや都市性に関するありさまの考え方はこの都市に通用しない、と結論されるのである。ここで「新しい都市研究」に「ロサンゼルス〔学派〕」の研究者たちはロサンゼルスと自らの着想を用いて『シカゴ学派』の支配に終止符を打と

うとしている」という長たらしい副題があることを、急いで付け加えなくてはならない。「ディア氏とその仲間たちは、ある社会科学の幽霊——都市学のシカゴ学派——を祓おうとしている」と指摘されるように、ディアやソジャの議論は、都市発展の空間形態を説明する「シカゴ学派」の定型化された図式、すなわち、バージェスの同心円モデルを念頭において立論されている。

繰り返しになるが、LA 学派によって対象化されたのは、自己完結的な社会としての都市ではなく、地理的に不均等な発展の新しい局面と場所の種別性の双方を反映しながら加速化する都市の再編である。再編は、それぞれの都市地域の歴史地理的なコンテクストに応じて固有の強度と形態をとるだろう。論者によって分析の水準に大きな隔たりがあるとはいえ、LA 学派のロサンゼルス論の根底には、グローバル化が、これまで時間をかけて確立されてきた国際分業のみならず、都市地域内の空間的分業をも再編する地理的動因になっている、という認識がある。

また、さらに一歩踏み込んで、世界中で起こっている都市的傾向——なかならず、グローバル化の多種多様な過程——が、いち早く、しかも顕著に発現する都市地域、言い方を換えれば、グローバル資本主義の影響力に対して最初に警鐘をならした都市こそロサンゼルスなのだ、という論調も LA 学派の特徴であった。「わたしたちは、いずれ他の都市がロサンゼルスに見られるような変化や再編を経験するだろうと予測しています」、というソジャの発言に象徴されるように、都市性の未来をロサンゼルスに見て取る論調——例外ではなく、原型であるという主張——が主流となっているのだ。

英語圏の地理学では LA 学派の活躍をそれなり目の当たりにしていたためか「新しい都市研究」に対する反応はほとんど見られなかったが、そうした「典型」や「原型」であるとする彼らの認識には、多くの社会学者から異論・反論が寄せられた。「あらゆるものがロサンゼルスに集まる」（ソジャ）とはいえ、『都市』でソジャが論ずる再編の過程ならびにその帰結として同定される都市形態は、わずか6つに過ぎない——都市形態の再編（外心都市 *exopolis*）、生産の地理の変容、グローバル化（世界都市の形成）、大都市の再分極化、要塞都市化、都市イメージの再編。月並みではあるが、「最大の」「最初の」と形容する前に、比較研究による検証が必要であろう。

5.3. 都市の記述をめぐって

もうひとつ、LA 学派の都市論の特質として注目しておきたいのは、都市を認識する際の彼らの構えである。たとえば、「新しい都市研究」における次のような挿話は、どのように受け取ったらよいだろうか。すなわち、

この都市のありように頭を悩ますロサンゼルス〔学派〕の研究者たちは、無数にある眺望のきく地点 *vantage points*〔から都合のいい地点〕を選ぶことができる。マイケル・ディアが

好むのは、〔都心から〕75 マイル離れたところ、あるいは2,000 フィートの上空だ。……ディア氏は、この地域の空間的布置 spatial arrangement は社会的布置を少なからず示している、と信じている。そこで彼は定期的に、この都市の縁辺にある砂漠へと車で出かけたり、レンタルしたヘリコプターからつねに変わりつづける都市のトポグラフィーを地図化しているのだ。

おそらくここにあるのは、(再度引用すれば)「巨大都市やグローバルな都市では、かつて行なわれた『遊歩』や『漂流』がもはや意味をもたない」という認識だろう(ライクマン 2001)。あるいは、都市認識の方法を概観したエシントンらにならって言えば、知を意味する2つのスペイン語 Saber (知識として知っている) と Conocer (経験として知っている) のうち、前者を選好する態度である(Ethington and Meeker 2001)。「walking the city」としての Conocer ではなく、「surveying the city」と指定される Saber をもとに得られた教訓、それが「都市性に関するありきたりの考え方」——特に都市形態の同心円モデル——はロサンゼルスにはもはや通用しない、というものであった。

しかしながら、このような視点をもたらししたのは、なにもディアばかりというわけではない。「surveying the city」としての Saber を都市記述の戦略として積極的に組み込んだのは他ならぬソジャその人であった。

5.4. ソジャのまなざし

『ポストモダン地理学』の第9章の「ロサンゼルスを分解する」で、ソジャはジェイムソンとルフェーブルとともに1984年におこなった「ボナヴェンチャー・ホテルを起点としてロサンゼルスの中心を螺旋状にたどる巡検」、そしてロサンゼルスの半径100kmの圏内を「鳥瞰的に周遊する巡検」とにもとづき、「ロサンゼルス都市域の批判的な人文地理(学)を構築」(つまり紙上で「再現」)するという、独自の都市誌の方法を編み出していた。ロサンゼルスの中心部の巡検は「^{ツァー}strolling」とも表現されているが、街路の経験にもとづく記述は明示されず、小型飛行機にでも乗っているかのような鳥瞰的な巡検と、高層ビルの最上階からの観察とが「神の目のようなまなざし」であるとして批判を招いたのである。とはいえ、ソジャには中心(要塞都市LA)にばかり照準する都市論の「マンハッタン化」に一石を投じようとする意図があったことも想起しておかなければならない。

『第三空間』の第9章にも「ちょっとした戸惑いを刺激として——アムステルダムとロサンゼルスの同時代の比較」と題する都市論が収録されている。この論文は、「スパイストラートにて On Spuistraat」と「スパイストラートを離れて Off Spuistraat」という2つの節から構成され、前者では1990年にソジャが滞在したスパイストラート(スパイ通り)を中心にした都市の歴史地誌を論じ、後者では20世紀後期のポストフォーディズム的な都市空間形成、都市形態の地理的再構成(脱中心化/多核化)に焦点を当てる。要するに、「スパイストラートにて」では、まさしく「下からの眺め seeing from below」

にもとづく都市誌を实践し、「スパイストラートを離れて」では、「ロサンゼルスを分解して」で採用した手法を再演するかのごとく、アムステルダムのセントラムを中心とする100km圏——「大アムステルダム」ないしは「ラントスタット Randstad」（大都市圏）——を設定し、アムステルダムを中心とした都市構造や都市形態を丹念に記述したのだった。

若かりし頃のソジャは「^{ストリート・ジオグラファー}路上の地理学者」であったというが、都市の記述においてその本領を発揮したのは、『ポストモダン地理学』におけるロサンゼルスフィールドの解釈学的巡検ではなく、まさしく「スパイストラートにて」のそれであった。街頭で彼自身が目の当たりにした風景を随所にちりばめ、まるでベンヤミンの「都市の肖像」を思わせるような描写がつづく。とはいえ、ソジャの移動する身体が各現場で可視的に表現されるわけではないのだが、セントラム全域をめぐる巡検にソジャを連れ出した人物がいた、というエピソードは興味ぶかい。ソジャは彼を「セントラムのボードレール」^{フィールド}、「都市インナー空間の地理学者—遊歩者」と評している。「ボードレール／遊歩者」と「地理学者」の互換性は、何を意味するのであろうか。少し嫌味な見方になるが、遊歩者について述べたベンヤミンの言葉を引用しておこう——「一方では、この男は、誰からも注目されていると感じていて、まさにいかがわしさそのもの。他方では、まったく人目に触れない、隠れこもった存在」。

さて、話を元にもどせば、「スパイストラートにて」で重要な役割を果たしたのは、言うまでもなく都市構造の骨格をなす街路としてのスパイストラートそれ自体と、その通りに面した彼の住まいであった。その一時的な住まいの窓辺は、何にもまして彼にとっての「眺望のきく有利な地点」であったという。すなわち、その眺めは「アムステルダムの活気ある中心における現代生活の感動的な光景が視覚的にひろがり、わたしの目を今までわたしが見ようとしてきたこと以外のものに向けて開かせてくれた」というのだ。

「スパイストラートにて」の白眉は、なんといってもこの「窓からの眺め」における都市景観の描写である。窓の外、その左右に広がるスパイストラートの建造環境を生きられる空間として描写するソジャのまなざしは、ハーヴェイの言葉を借りるならば、「豊かで複雑な資本主義の歴史地理における都市空間形成の役割と同様に、建造環境の形成、建築デザイン、街頭文化とミクロ・ポリティクス、都市の経済・政治にまでおよぶさまざまな事柄」を捉える可能性を示していると言えよう（ここでソジャは、それと意識することなく、ルフェーブルの身ぶりを反復している点も面白い）。グローバル化のさまざまな歴史的段階を街路や建造環境のレベルから捉え返したすぐれた都市誌である。

5.5. ひとつの回答

『ポストモダン地理学』と『第三空間』の第9章は、どちらも鳥瞰的な巡検を採用しているという点で共通性がある。すると、『第三空間』の第9章に「上からの眺め、そして下からの眺めについて」という後記が付されたのは、2つの点で当然であったと言えるかもしれない。まず1点目として、すでに指摘したように、ポストモダンの人文地理学をめぐる論争のなかでひとつの焦点となったのは、「上からの眺め」と「下からの眺め」に代表される都市へのまなざしであったこと。つまり、ソジャはこの論考で自身への批判を踏まえて「上からの眺め」と「下からの眺め」を調停すべく介入したのである。そして2点目は、前述のとおり、「ちょっとした戸惑いを刺激として」自体が批判に代える都市誌として構成されていることである。

そもそもソジャは、この2つの見方を、都市についてより多くのことを学ぶための問いの立て方として「上からの眺め、そして下からの眺めについて」のなかで次のように整理している。すなわち、都市の状況を概念化するのは、「日常生活のミクロ地理に没入し、都市の街路からの局所的な眺め」によってなのか、あるいは「都市を全体として観察し、より包括的に地域的スケールないしはマクロ空間スケール」で眺めることによってなのか、と。ソジャ自身の結論は、どちらも不完全であることを認めつつ、二者択一でなく、二者対等に必要である、というものであった。エシントンらもまた、空間を理論化する際に「一方には都市現実の批判的分析を、他方には日常生活の批判的分析」を含むことが重要であると説くルフューブルに依拠して2つの知 ‘Saber y conocer’ の必要性を主張する。

そして二者対等にと主張するソジャは、「下からの眺め」を選好する者たちの構えを批判した。すなわち、「都市的状況の全体論的読解に対する軽蔑」、そして「下からの眺め（極度に局所化された遊歩者の個々の声にもっともよく示される、日常生活の詳細な民族誌—地誌 ethnography-geography）」の選好という一方的な態度に対してである。そうした構えをとる者たちを、「〔上からの眺めを〕手におえない男性主義的な視覚至上主義と見なし、ローカル、身体、街路、日常といった親密なものばかり好んで焦点を当てるフェミニストの都市批評家たち」と特定し、「下からの眺め」の特権化に多大な影響を及ぼした人物として、ミシェル・ド・セルトーを名指ししている。周知のとおりド・セルトーは、上からの眺めを「読みやすさへの欲望」のもとに街路レベルの差異、すなわち都市生活の日常性を均質化する voyeurism であるとして、空間の実践としての歩行から都市への問いを展開した人物である。ド・セルトーの議論、そしてその影響を受けたフェミニストの議論と対峙するソジャは、その構えを批判こそすれ必ずしも「下からの眺め」そのものを唾棄しているわけではない。「上からの眺め」と「下からの眺め」を往還しながら都市を記述すること、そして都市の理論を構築しようとする意図は、スパイストラートをめぐる議論からも十分にうかがい知ることができるし、これは『ポス

トメトロポリス』においても引き継がれる。

とはいえ、ルフェーブル自身はと言えば、「都市現実」から出発して「日常生活」を研究の対象とする場合、「生きられる経験」を削ぎ落としてしまう危険があることも指摘していた（どちらから出発しても同じ地点にたどりつく、ということはあるのだろうか）。ベンヤミンの遊歩者、シカゴ学派のフィールドワーカー、パンジの探検者、シチュアシオニストの漂流者、ド・セルトーの歩行者など、都市論の系譜に燦然と輝くさまざまな形象を想起するとき、このようなルフェーブルの思想の実践性を彼らのなかに見いだすこともできよう。

6 生きられた経験を起点として——まとめに代えて

すでに述べたように、「都市プロセスを観察し、『想像力において都市を所有する』ための有利な立脚点＝眺望の効く位置（a vantage point）を構築することは、われわれがもっともしんどい知的労働に携わることを意味する。そうすることで、日常の都市的経験がつねになりがちな多元的混乱を理解しつつ、われわれが都市を全体として理解できる理論装置の構築にたどりつける」、とはハラウェイの言葉である。だが、ダナ・ハラウェイが著名な論文「状況に置かれた知」において述べたように、「ローカル、身体、街路、日常といった親密なもの」といった「下から見るという作業」が「たやすく習得できるような作業」だというわけではない。それもまた、「熟練を要する問題」なのである（ハラウェイ 2000: 365）。

ストリートから都市を問うという実践は、問う者の location と密接に関わっている。ここでいう location とは、単にモノや人が存在する「位置」を示すのではなく、能動的であれ受動的にであれ、ある特定の場を占めている状態を指す。ハラウェイが指摘するように、位置づけが可能な、そして部分的な視角こそが客観的であるとするならば、「状況に置かれた知」を生み出すロケーションこそが問題とならなければならない。そしてロケーションを選び取るという行為は、まさに「自己について知る作業」にはかならず、もはや「無垢なアイデンティティ・ポリティクス……に依拠すること」はできない。それがゆえに、「見るという行為は……位置の選び方に関わるポリティクス」となるのだ。

冒頭で触れた地理学者のドリーン・マッシーは、自身が長年暮らした「愛着のある場所」であるというキルバーンの風景を、ハイロード沿いに歩きながら描写している。マッシーが自らの日常生活の舞台を歩きながら積極的に書き留めたのは、この場所とその他の世界との結びつきを示す可視的な徴であった。その可視的な徴を手がかりにして想像されるのは、この場所にいたる人びと、情報、モノ、カネの経路の多様性、ひいては英国の帝国主義の歴史などである。つまり「（愛着のある）場所」は、1本の線で境

界を定められた範域で完結するだけの特徴や歴史を有した領域である必要はない。「場所」とは、つねに／すでに他者や他所との関係において存立しているのであり、そうした多種多様な関係が交差する唯一の点という意味で、場所には独自の特徴があると言えるのである。日常生活のなかで、あるいは街頭で目の当たりにするローカルな社会諸関係を、より広範な（グローバルな）諸関係と結びつけることによって喚起される感覚、それをマッシーは「グローバルな場所感覚」と呼んだのだった。

当初マッシーは「権力者の燦然と輝くスペース・プラットホームの上」（ハラウェイ 2000: 365）から「権力の幾何学」という「世界の見取り図」を描き出しつつ場所論を展開したのだが、「グローバルな場所感覚」が喚起されるのは「下から見るという作業」、すなわちストリートの地理学を実践することにおいてであった。ここでいうストリートの地理学の特徴は、つねに位置が限定されていること、つまり「無限の移動性や互換性」とは無縁であることにあり、そこから生まれるのが「状況に置かれた知」なのである。

かつてアンリ・ルフェーブルは「空間の生産」を論じるなかで、「認識が対象とするのは、一方の練り上げられた空間の表象〔思考される空間〕と、他方における表象の空間〔生きられる空間〕との間の結びつきである」と述べたが、『空間の生産』の序論とでもいうべき『空間と政治』の「序論」では、社会的に（再）生産される空間を理論化する際に「一方には都市現実の批判的分析を、他方には日常生活の批判的分析」を含むことが重要であると説いていた。『空間の生産』では、先の引用文に先立って、「認識が罠に陥るのは、それが空間の表象〔思考される空間〕から出発して「生活」〔生きられる空間〕を研究の対象とするときである。というのも、そうすることによって、認識は生きられる経験を切り縮めてしまうからである」と主張している。

都市を問う際にストリートを起点とする構えに何らかの有効性があるとするならば、おそらくそれは、生きられる空間（日常生活）にまつわる知から出発して、思考される空間（都市現実ないしは都市の全体性、あるいはグローバルな空間性）を対象とする場合となるだろう。それは、グローバル化時代の空間論的想像力として構想されるべきものである。

付 記

本稿は 2004 年 12 月 23 日に行なわれた研究会の発表要旨に沿って、既出の論文（加藤 1999; 2001; 2002a; 2002b; 2004）から関連する部分を摘要してまとめたものです。

文 献

浅暮三文

2005 「渋谷無景」『朝日新聞』2005年4月11日夕刊。

ベンヤミン, W.

1972 『ベンヤミン著作集 15 書簡Ⅱ 1929-1940』晶文社。

1975 『ベンヤミン著作集 14 書簡Ⅰ 1910-1928』晶文社。

1997a 「モスクワ」浅井健二郎編訳『記憶への旅』（ベンヤミン・コレクションⅢ）pp. 163-224, ちくま学芸文庫。

1997b 「パリ——鏡のなかの都市」浅井健二郎編訳『記憶への旅』（ベンヤミン・コレクションⅢ）pp. 232-239, ちくま学芸文庫。

1994a 『パサージュ論Ⅲ』今村仁司ほか訳, 岩波書店。

1994b 『パサージュ論Ⅱ 都市の遊歩者』今村仁司ほか訳, 岩波書店。

2003 『パサージュ論第3巻』今村仁司ほか訳, 岩波現代文庫。

ブローデル, F.

1990 『都市ヴェネツィア』岩崎力訳, 岩波書店（同時代ライブラリー）。

Dear, M. and J. D. Dishman (eds.)

2001 *From Chicago to L.A.: Making Sense of Urban Theory*. Sage.

ド・セルトー, M.

1987 『日常の実践のポイエティック』山田登世子訳, 国文社。

Ethington, P. J. and M. Meeker

2001 Saber y conocer: The Metropolis of Urban Inquiry. In M. Dear and J. D. Dishman (eds.) *From Chicago to L.A.: Making Sense of Urban Theory*, pp. 403-420. Sage.

フロイト, S.

1977 「不気味なもの」『フロイト著作集 3』pp. 327-357, 人文書院。

Gregory, D.

1994a Time-geography. In R. J. Johnston, D. Gregory, D. M. Smith (eds.) *The dictionary of human geography* (3rd edition), pp. 624-628. Basil Blackwell.

1994b *Geographical Imaginations*. Oxford: Blackwell.

ハラウェイ, D.

2000 『猿と女とサイボーグ——自然の再発明』高橋さきの訳, 青土社。

ハーヴェイ, D.

1999 『ポストモダンシティの条件』吉原直樹監訳, 青木書店。

ジェイコブス, J.

1977 『アメリカ大都市の死と生』黒川紀章訳, 鹿島出版会。

ジェイ, M.

1996 『力の場——思想史と文化批評のあいだ』今井道夫訳, 法政大学出版会。

加藤政洋

1999 「ポストモダン人文地理学とモダニズム的「都市へのまなざし」——ハーヴェイとソジャの批判的検討を通して」『人文地理』51 (2): 48-66。

2001 「都市と空間的实践——「時間地理学」とその周辺」『流通科学大学論集——人文・自然編』13 (2): 37-49。

2002a 「グローバル化と地理学的想像力」『思想』933: 94-107。

- 2002b 「ストリート・ジオグラフィーと都市記述」『流通科学大学論集——人間・文化・自然編』15 (1): 1-11。
- 2004 「エドワード・ソジャとポストモダンの転回」『都市文化研究』3: 166-181。
- 加藤政洋・大城直樹編
- 2006 『都市空間の地理学』青土社。
- ルフェーブル, H.
- 2000 『空間の生産』斎藤日出治訳, 青木書店。
- ライクマン, J.
- 2001 「時間=外」『Anytime』pp. 146-152, NTT 出版。
- リンチ, K.
- 1968 『都市のイメージ』富田玲子・丹下健三訳, 岩波書店。
- マクドナウ, T.
- 2001 「漂流とシチュアショニストのバリ」暮沢剛巳訳『10+1』24: 85-92。
- Massey, D.
- 1991 A Global Sense of Place. *Marxism Today*, pp. 24-29. June.
- マッシー, D.
- 2002 「権力の幾何学と進歩的な場所感覚」加藤政洋訳『思想』933: 32-44。
- Miller, D.
- 2000 The new urban studies. *The Chronicle of higher education*. August 18, 2000.
- 長尾謙吉
- 2006 「ロサンゼルス学派——現代都市像の再構築」加藤・大城編『都市空間の地理学』pp. 239-250, 青土社。
- 南後由和
- 2006 「シチュアショニスト——漂流と心理地理学」加藤・大城編『都市空間の地理学』pp. 52-69, 青土社。
- 丹羽弘一
- 1996 「地理学と社会的現実」『空間・社会・地理思想』1: 1-11。
- Park, R. E., E. W. Burgess and R. D. McKenzie (eds.)
- 1925 *The City*. The University of Chicago.
- パーク, R. ほか
- 1972 『都市——人間生態学とコミュニティ論』大道安次郎・倉田和四生共訳, 鹿島出版会。
- Scott, A. J. and E. W. Soja (eds.)
- 1996 *The City: Los Angeles and Urban Theory at the End of the Twentieth Century*. University of California Press.
- Shields, R.
- 1996 A Guide to Urban Representation and What to Do About It: Alternative Tradition of Urban Theory. In A. King (ed.) *Re-Presenting the City*, pp. 227-252. New York University Press.
- ソジャ, E.
- 2001 「ちょっとした戸惑いを刺激として——アムステルダムとロサンゼルス同時代の比較」『10+1』24: 146-155, 『10+1』25: 151-168。
- 2003 『ポストモダン地理学』加藤政洋ほか訳, 青土社。
- 2005 『第三空間』加藤政洋訳, 青土社。

Stewart, L.

- 1995 Bodies, vision, and spatial politics: a review essay on Henri Lefebvre's *The Production of Space*. *Environment and Planning D: Society and Space* 13: 609–618.

杉浦芳夫

- 1989 『立地と空間的行動』 古今書院。

ヴァン＝マーネン

- 1999 『フィールドワークの物語——エスノグラフィーの文章作法』 森川渉訳, 現代書館。